

鴨緑江鉄橋建設作業

神奈川県 三 田 芳 雄

私は大正十四（一九二五）年八月十七日、東京都城東区北砂町で生まれました。昭和十三（一九三八）年に小学校を卒業、翌年四月に砂町高等学校に進み、十五年に卒業、四月に汽車製造株式会社に就職し、同社の青年学校へと進学、十九年には本科生となりました。

昭和二十年一月二十五日、東部八十六部隊鉄道第一連隊に入隊、三十一日には博多に向いました。博多港で乗船、真冬の玄界灘は荒れに荒れ、船酔い続出で大変でした。釜山港に上陸、朝鮮鉄道にて満州ハルピンにて下車、凍てつく道を二時間歩行し、第五八〇三部隊、鉄道第二連隊に入隊しました。

昭和二十年二月七日、午前八時の気温はマイナス二七度でした。第八中隊長、田中肇中尉殿の下、

激しい訓練が連日続行されました。このころは内地からの補充兵は絶たれて、現地召集兵や朝鮮人が新兵として入隊してきました。しかし朝鮮人の兵士には脱走する兵が多くて困りました。厳しい訓練に耐えられなかったのでしょうか。そのころ、軍曹を長とする建設部隊が編成され、鴨緑江の鉄道橋梁の建設のため現地の小学校を宿舍としました。

鉄道連隊、ハルピンの四百人は中の島から安東に向け、また鉄道第四連隊（路第三四一〇二部隊）は牡丹江の六百人が安東対岸から新義州に向けて鉄道敷設に当たりました。この建設は同時進行をさせるために夜間作業はもちろん、早朝起床という厳しい作業が続けられました。

私たちは新義州、中の島を後に一路ハルピンに戻りましたが、五月に入ると南支、中支、沖繩、九州など、次々に転属が始まり、名称も混成部隊第四三五二部隊、鉄道第二十連隊となりました。

私は残留となり教育終了者は各勤務に就きました。

た。その後炊事勤務約一カ月が終り、七月二十日の作戦命令によって廢線中であった河里線、草原線の撤収作業に掛りました。

蒸気機関車、有蓋貨車、糧秣タンク車、寝台宿車、九七式貨車に器材工具を積み込んで出発し、現地では引込線にこれらのタンク車や寝台車を停止させて宿舎とするなどして、作業を行いました。

この作業は、我々兵士がレールを外して貨車に積み込み、枕木は満人勤報隊が貨車に運び込み、移動しつつ撤収作業に当たりました。それらは孫呉駅に集結され、内地での米軍による被害地の修復に用いるためでした。

この作業は予定より早く終了してハルピンの部隊に戻りましたが、そのころにはソ連軍の満州への侵攻の話がありました。そこに残った部隊の兵器、武器などの装備は極めて僅かなもので、ソ連軍の侵攻に対して極めて苦戦したものと思われる。

八月某日、鉄道整備のため南下し、吉林で終戦

となりました。ここでは満人が暴動を起して、日本人の民家を襲撃するなどありましたが日本軍が警備に当たり事無きを得ました。

八月二十日、大陸鉄道司令部でソ連軍による武装解除が行われ我々はソ連側に連行されました。敦化飛行場では、日本兵は連日連夜の武装解除が行われ、ソ連側に連行されたので日本兵の姿はありませんでした。我々も連日、夜通しの移動また移動で疲労は極限に達し、ちょっとした休憩時には寝入ってしまう状態でした。そして各地を転々と移動し、十二月のある日、ソ連の有蓋貨車に乗せられ、外部よりは鍵を掛けられ、満州里を通り過ぎました。

ソ連兵は「日本へ帰国させる」との一点張りでチタに到着しました。ここでソ連の指導者が交替、さらに汽車は奥地へ奥地へと進みました。

イルクーツクで降車すると眼前にはバイカル湖が見えました。ここで飯炊きが始まりました。水くみ、米研ぎ、薪集めなどそれぞれの炊事の用意

に取り掛かりました。そして食事をして貨車に戻ると前と同様に外から鍵が掛けられました。

こうして貨車はクラスノヤルスクを過ぎ、ウラル山脈を越え、ヨーロッパに入りました。

かくして第十六支部タガンログ市に到着、ここは抑留者の係留地と思われました。二、三日して次の収容所に移動、今度は凍てつく悪路を歩行すること三時間、昭和二十年十二月末にロフトフスカロフトフ市第四七五収容所に入りました。

ここでは一号棟に健康者、二号棟は補充者、三号棟は寝たきりの病人などの入る収容棟でした。極寒マイナス六〇度、雪の中で点呼です。千人を数えるのにロシア将校が通訳と共に実に一時間以上も要したものでした。向うさんが一から数え始め、数え終わって納得するまで点呼は終わらず、したがって朝礼も終わらず、この間に同胞は次々に倒れてゆき、無残の限りでした。

また食事は誠にひどいもので、塩スープに馬鈴薯の厚味五ミリほどのものが二、三枚、それに厚

み十ミリ程度の黒パン一枚です。寒気は零下六〇度、加えて強制労働、これらによる故障者が続出して次々に倒れ、死亡してゆきました。

ソ連側もこの有様には驚いたと見え、マイナス三〇度に気温が上昇するのを待って作業に出動するようにになりました。また何度か手に職の有る者を探している模様でしたが、私はその都度無職であると言いつきました。

このため私たちの作業は、穴掘り、貨車の積み下ろしなどで、工場内の運搬作業は、一輪車での石炭殻の運び出しでした。近くの煉瓦工場の作業には昼食には収容所に戻りました。その途次、そこへ走って来たトラックの上から満載の砂糖大根を道路に落して行きます。それで我先に駆けつけてそれを拾う訳です。先の方まで落ちていてそれを拾うため駆け出した者は、隊列から離れたために脱走者と見なされて撃たれて落命しました。誠に酷いことでありました。

こんな状況の収容所では、朝起きると隣りの兵

士が死んでいる。毎日それが五、六人ぐらいいい
たと思われまゝ。死体はマイナス六〇度の踊場に
素肌のままで積んであり、二十人ぐらいが溜まる
と櫓に乗せて荒野に運び埋めます。冬の墓場の穴
掘りは凍土で大変でした。それでも仲間を供養す
る墓地です。で懸命に頑張りました。

春が来て雪が消え、一雨ありますと一面に草花
が咲きそろいます。寒地で一斉に来る春に嬉しか
ったものです。ある時、モスクワからの視察があ
るとの知らせがあり墓には土を盛り、墓標を立て、
番号を付けるなど、ロシア人は大慌ての様子でし
た。

そのころですが寝ようとすると夜間作業に狩り
出されました。五十トン貨車の石炭降しで、一両
終わると次の一両と、寒さと疲れと眠気で全く生
きた心地がしませんでした。私もとうとう健康者
棟から二号棟の補充者棟に移され、寝たきりとな
って死を待つのみとなりました。

昭和二十一年六月某日、この収容所を去るとき

には当初いた千人の仲間が、半分の五百人ほどに
なっていました。それ以後のことは不明ですが、
さらに増加したことでしょう。

行くと帰りの列車は全く変わりました。貨車の
両側の扉は開け放たれ、簡易トイレも設置してあ
り、食事もソ連兵が運んでくれました。ウラル山
脈、バイカル湖周辺には残雪が有り、美しい光景
を眺めました。白樺林の中を通過するのですが、
民家等は見当たりません。

途中で二度入浴がありました。その際に衣服は
滅菌され、シラミは退治されました。数日後に蒸
気機関車に連結されたシャワー車で体を洗い流し
ましたが「シラミを一匹でも着けていたら日本へ
は帰さない」と言われました。

ポシエツトから朝鮮に渡り、古茂山の駅に着き、
河原に天幕を張り、ここで半月を過しました。古
茂山駅より貨車で平壤に着いたのは七月中旬と思
います。

三合里には日本軍部隊があり、そこまで歩行さ

せられましたが、栄養失調のためですか、はじめの四列縦隊は道いっぱいに広がって歩く始末です。ソ連指揮者も見かねて日本軍に連絡を取り、トラックを向けてもらいました。こうして山の中で車を降りると、日本とソ連将校とで持物検査を受けました。

この収容所には二、三日とどまり、その使役には、竜城駅近くの朝鮮鉄道の宿舎を使っていた旧日本軍の航空弾薬庫内の、草刈りや五十キロ爆弾をトラックに積み込む作業などでしたが、栄養失調の体には大変重く感じられました。爆弾は山間部に運び爆破させますが、空き箱は持ち帰り入浴の薪としました。

そのころ赤痢患者が出て、大同江付近の朱乙収容所に行くこととなりました。ここでの営内作業は九月ごろと思います。十月に入り、元日本軍の陸軍病院での使役を行いました。広い病院内の各所の掃除を行いました。またソ連将校宿舎の掃除や水くみ等をしていました。それからはソ連兵の

指名で、彼らの水くみや掃除をし、帰りにはタバコ、パンなどを手にしました。ソ連兵はおだてると銀杏の木に登り銀杏を落してくれ、それを食べたりしました。そのような日を繰り返していますと、体調も次第に回復に向いました。

昭和二十一年十二月三十一日、雪中を歩行して具南港に着きますと、朝鮮軍の日本兵がソ連に連行されて行き、自分たちもまたかと思いました。しかし日本の船員が寄って来て「長い間御苦労様」と言われて大阪商船の貨物船「大瑞丸」(七、〇〇〇トン)に乗船、昭和二十二年一月六日、佐世保に上陸できました。

いろいろありましたが横浜市本牧の実兄と再会でき、再度汽車会社に復職し、八十二歳の今日を迎えました。最後に異境で他界された多くの御霊に対し、御冥福を祈念申し上げます。